

東京歯科大学同窓会会報

東京都千代田区神田
三崎町一ノ七

発行所

東京歯科大学同窓会

編集兼 渡辺 富士夫

発行人 電話東京(301)3421(代)

恒例の新年名刺交換

祝賀会開かる

近年にない長閑な初春を迎えた母校本館玄関には日の丸の旗が平和の象徴のように翻り、おのづと新年のさわやかさが感じられる。恒例の新年名刺交換会は午前十一時より一階大ホールにおいて開催された。白髪の同窓大先輩から、昨年卒業した新進の青年同窓にいたる多数の会員がホールに設けられた数卓のテーブルをとり囲み互に新年の挨拶を交すうち、松宮誠一教授司会のもと、まず福島秀策学長から新春の所感と本年における本学発展への具体的抱負が力強く披露された。つづいて今回新たに同窓会長に就任された田丸前同窓会副会長から、新年並びに会長就任に際してのご挨拶があった。とくに、今後の同窓会の発展は母校との絶体的協調がなくては遂げえられぬものであり、殊に本年は同窓会創立七十年に当るので、母校の諸先生をはじめ、全国会員諸氏の倍旧の御協力、御鞭撻を切に願する次第であるとの挨拶があった。

つづいて母校名誉教授堀江銑一先生の音頭により全員乾杯、新春祝賀の宴は開かれた。宴たけなわにして旧臘外遊より無事帰国された三崎鈴郎教授の謡曲鶴亀の謡初めがあり、新年慶祝のムードは倍加された。更にこのムードに合せるが如く、堀江先生から「孫のう蝕予防」についての体験談が新春放談として披露され、満場和気霽々のうちにめでたく本年の名刺交換祝賀の会は正午過ぎ

東京歯科大学学会例会御案内

同窓会二月例会の前日、二月二十二日に東京歯科大学学会例会を左記により開催致します。同窓各位の御来会をお待ち致しております。

日時 昭和三十九年二月二十二日

(土) 午後一時より

場所 東京歯科大学講堂

終宴となった。毎年このことから、しかも意義ある母校と同窓会との共催事業の一つであるのかかわらず、恒例の講演会や総会に較べ出席者が少なかったようであるが、新同窓会長のもと、今後の新企画による同窓会事業にはどしどしふるって多数会員、殊に青年同窓の積極的参加を強く願う次第である。



同窓会二月例会

講演会開催御通知

左記により本会主催による講演会を開催致します。万障お繰り合せの上御参加下さるよう御案内申し上げます。

記

日時 昭和三十九年二月二十三日(日) 午後一時―四時三十分
場所 母校講堂

●「欧米視察談」午後一時より

金竹哲也教授は昨年八月二十九日羽田を出発されて、ロスアンゼルスを出しに、アメリカに約二カ月、ついでヨーロッパ諸国を歴訪されて、多くの収穫をえて昨年十二月二十七日無事帰国されました。理工学者の目で見聞された諸外国におけるこの方面の実情についてのお話しうかがえると思います。

○欧米八カ月の旅

昨年五月四日から十二月二十三日まで、実に八ヶ月の長期間にわたり、ヨーロッパからアメリカ、カナダにかけての視察をおえて元気に帰国された三崎鈴郎教授に、同教授の鋭い観察にもとずく、御専門の分野はもとより、諸外国の大学、病院及び臨床家の実態等について御講演を願うことになりました。

●「座談会」午後二時五十分より

○補綴臨床の現況

―明日からの臨床に役立つために―

挨拶 北村勝衛教授
講師 鶴養 弘教授
司会 羽賀通夫助教授
関根 弘助教授
山本 為之氏

現在母校の補綴学教室で実際に進行されている「補綴臨床」に関する理論と、その実際について、新進の講師より、具体的に、臨床家各位が日頃知りたいと思っておられることを、山本氏より引き出していただき、明日の臨床に役立てられるものと期待しております。

昭和三十九年二月五日

東京歯科大学同窓会

会長 田丸 将士

同窓会各位殿

同窓会各位殿

福島 秀策

東京歯科大学学長

昭和三十九年二月十日

なお、当日は六十三題の研究発表が行われる予定であります。

就任の辞

会長 田丸 将士

昨年十一月九日開催の評議員会は満場一致不肖私を本会会長に選任されました。心に何等の準備を持っていなかった私は事の意外に驚きました。元より其の器に非ず、学も徳も力もなく、其の上退陣の事のみを考えていた私は大に戸惑いましたが、四囲の情勢上止むを得ず御引受けすることを決意しました。

評議員会で役員選任の一切を委任されましたので、慎重に詮衡の結果、副会長三名、理事十三名、監事も御選任由上げ、夫々御就任を頂きましたので、此機会に全役員の方々を代表して御挨拶を申上げ会員諸氏の御協力と御援助とを切に御願ひ致します。

我々役員一同は光輝ある我が同窓会の永遠の発展を計ることを基本理念とし、之を実現するため、公正、公平、誠実の信念の下に、適切な会務の運営を行い、民主主義的精神を

尊重し、会則、議決、予算等に従い間違ひのない方法で進んで行く所存であります。

母校との関係の緊密化に努めると共に、会員の親睦、同結の強化に力を注ぎ、他大学の同窓会との交際は社会連帯、調和の精神を以て臨みたいと考えております。

我々の意願とする所は、高雅なる同窓会、力もあり權威もある同窓会、人情味溢るる同窓会、会員から母校からも喜んで頂ける同窓会、玲瓏玉の如き同窓会であります。之を具現するため全力を挙げて邁進する覚悟でありますから、会員諸氏も我々の意のある所を御推察の上御鞭撻を賜りますよう伏して御願ひ申し上げます。

終りに会員諸氏の御健康と御発展を祈念いたします。

昭和三十九年元旦。

新役員紹介

会長

田丸 将士

明治二十九年

千葉県出生



大正七年 母校検定合格

昭和二十一年 都教職員適格審査員

昭和二十三年 北多摩歯科設立委員

現在顧問

昭和二十三年 医療制度調査会委員

新役員紹介

副会長

荒谷 龍

明治三十四年

広島県出生

母校卒業

昭和三十四年 法務省人権擁護委員

昭和三十四年 本会副会長

現住所 小金井市貫井北町五の七

四九に開業

昭和三十九年 広島県歯科医師会会

長

昭和三十三年

日本歯科医師会監事



昭和三十四年 本会顧問
昭和三十八年 母校評議員
現住所 広島県広島市大手町三の三十六

副会長

大井 清

明治三十三年

愛知県出生



大正十二年 母校卒業

昭和六年 母校教授

昭和三十六年 母校病院院長

昭和三十八年 母校常務理事

現住所 東京都世田谷区経堂町二〇一

副会長

菅野 修

明治三十年

宮城県出生



大正九年 母校卒業

昭和三十二年 宮城県歯科医師会会長

昭和三十八年 宮城県歯科医師会顧問

現住所 仙台市小田原大行院丁ノ一五

理事

天野 博徳

大正八年

東京都出生



昭和十六年 母校卒業

昭和三十年 医療法人社団真洋会

開設 同理事長

昭和三十五年 母校同窓会理事

昭和三十六年 大日本歯科医学会理事

現住所 東京都目黒区平町九一

五十嵐 堯昭

大正二年

静岡県出生

昭和十一年 母校卒業

昭和三十二年 静岡県歯科医師会副会長

昭和三十六年 日本歯科医師会専務理事

昭和三十八年 日本歯科医師会代議員

現住所 熱海市浜町落二〇一四

井上 久男

明治三十五年

東京都出生

昭和十五年 母校卒業

昭和三十七年 社会福祉法人あそか会あそか病院顧問

昭和三十七年 本会理事

現住所 調布市上布田町二五

後藤 芳郎

明治四十二年

大分県出生

昭和十三年 母校卒業

昭和三十七年 本会理事

現住所 調布市上布田町二五

田辺 明

明治四十二年

大分県出生

昭和十三年 母校卒業

昭和三十七年 本会理事

現住所 東京都新宿区戸塚町三の九〇八

新潟県出生

昭和三十七年 本会理事

現住所 東京都世田谷区経堂町一七一

宝田 忠

昭和四年

東京都出生



昭和二十八年 母校卒業

現住所 東京都江戸川区小岩町二の二五八四



昭和八年 母校卒業

昭和三十五年 日本歯科医師会専務理事、日本学校歯科医会常任理事

昭和三十六年 日本口腔保健協会監事

現住所 東京都日野市日野二六九七

高木 昂

明治四十一年

東京都出生

昭和八年 母校卒業

昭和三十五年 日本歯科医師会専務理事、日本学校歯科医会常任理事

昭和三十六年 日本口腔保健協会監事

現住所 東京都日野市日野二六九七

共済担当

昭和四十一年

東京都出生

昭和八年 母校卒業

昭和三十五年 日本歯科医師会専務理事、日本学校歯科医会常任理事

昭和三十六年 日本口腔保健協会監事

現住所 東京都日野市日野二六九七

共済担当

昭和四十一年

東京都出生

昭和八年 母校卒業

昭和三十五年 日本歯科医師会専務理事、日本学校歯科医会常任理事

昭和三十六年 日本口腔保健協会監事

現住所 東京都日野市日野二六九七

共済担当

昭和四十一年

東京都出生

昭和八年 母校卒業

昭和三十五年 日本歯科医師会専務理事、日本学校歯科医会常任理事

昭和三十六年 日本口腔保健協会監事

昭和二十六年 母校卒業
昭和三十七年 本会理事
現住所 東京都調布市国領町二二
三



長谷川 二郎
昭和六年 學術編集担当
愛知県出生

昭和三十三年 母校卒業
昭和三十四年 母校理工学教室講師
現住所 川崎市百合丘二の五、百
合丘団地四〇の四〇三



松宮 誠一
事業担当
明治四十二年 滋賀県出生

昭和五年 母校卒業
昭和二十二年 母校病理学、口腔病
理学教授
現住所 東京都杉並区西田町一の
七七三



山崎 数男
事業担当
大正八年 東京都出生

昭和十六年 母校卒業
昭和三十六年 日本歯科医師会常務
理事
現住所 東京都港区赤坂表町三の
二六の三



山本 為之
事業担当
大正八年 富山県出生

昭和十六年 母校卒業
日本歯科医師会調
査、広報、編集委員
現住所 神奈川県横浜市別所町一
二八七



渡辺 富士夫
學術編集担当
大正九年 東京都出生

昭和十七年 母校卒業
昭和三十八年 母校保存学教室教授
現住所 東京都世田谷区松原町二
の六九九



會計監事
永田 令蔵
明治三十三年 東京都出生

大正十年 母校卒業
昭和三十九年 日本歯科医師会厚生
委員、東京都歯科医
師会代議員
現住所 東京都大田区新井宿五の
五二一



會計監事
中久喜 八十
明治三十年 茨城県出生

大正十一年 母校卒業検定
昭和二十六 本会評議員、東京都
歯科医師会代議員
現住所 東京都台東区浅草田中町
二の一

母校だより

◇三崎・金竹教授帰国さる

かねて外遊中であつた兩教授は、
それぞれ昨年十二月二十三日及び十
二月二十八日、無事帰国された。

◇人事

辭任

龜谷博昭助手(微生物)

三九・一二・一〇

熊野光紀副手(補綴)

三八・一二・二八

山野登講師(市病小兒)

三九・一・三一

昇任

竹内太刀夫講師(微生物)は助教授
に昇任された。三九・一・二二

新任

鈴木功一助手(市病小兒)

三九・二・一

兼任

笠原謙訪子副手(保存)は衛生士学
校講師を兼任。三九・一・九

◇昭和三十九年度母校大学院歯学研
究科入学要項 (抜萃)

一、募集人員 四四名

一、受験資格

1. 歯科大学または大学歯学部を卒
業したもの。

2. 1と同等以上の学力があると認
められたもの。

退任御挨拶

今般私共は任期満了し退任致すこ
とに相成りました。在任中賜りま
した全国各位よりの御支援に対しま

して心から御礼申し上げます。
昭和三十八年十二月三十一日

会員各位殿

3. 医科大学または大学医学部を卒
業したものは、歯科理工学を除
いた歯科基礎系のみ志望し得る
一、入学願書提出期間
昭和三十九年三月二十六日より
同四月二十日まで
一、試験科目

遠藤至六郎先生二十三

回忌法要行なわる

去る二月八日、遠藤先生の御命日
にあたり、上野池の端の先生の菩提
寺である教証寺で、本学口腔外科学
教室が中心となつて、二十三回忌の
法要が営まれた。当日は嚴寒の候に
もかわらず、先生の御遺徳を忍ん
で、大学及び同窓関係者ならびに門
下生が多数集まり、非常に盛会であ
つた。本会からは田丸会長が代表と
なつて参列焼香した。

なお口腔外科学教室同門会(精到
会)ではこれを機会として遠藤先生
の未亡人に対して、御見舞金を広く
集めるよう、有志の人々に呼びかけ
ている。

専攻主科目および英、独の二国
語
一、試験日及場所
四月二十三日、二十四日
東京歯科大学
詳細は母校教務部へ照会されたい。

遠藤先生未亡人に對
する御見舞募金

恩師遠藤至六郎先生の二十三回
忌を機会として先生の奥様に對し
御見舞金を差上げて老後を御慰め
したいと存じます。有志各位の御
協力を御願ひ申し上げます。
昭和三十九年二月八日
精到会名譽会長 大井 清
會長 長尾喜景
一、一口老千円也(何口にても可)
二、期日は勝手ながら二月末日ま
でにお願いします。
三、送金先
東京都千代田区神田三崎町一
の七
東京歯科大学
口腔外科学教室

本会名譽會員

佐藤運雄先生の日本大学葬盛大に営まる

本学同窓会名譽會員であられる佐
藤運雄先生は、去る一月一日、八十
四才の高齡をもつて逝去されまし
た。先生の齒科界全般にわたる業績
は、ここに今更ら申し述べるまでも
なく燦然たるものであります。
本葬は、一月十九日、日本大学葬
第であります。

学位受領者紹介

吉木 周作君



昭和三十三年卒業。直ちに本学病理学教室に入室、現在同教室講師として活躍中。その間、昭和三十五年六月より六カ月間、阪大歯学部森昌助教授の下に内地留学し、組織化学技術を得得。本教室に復帰後は、専ら硬組織の組織化学的研究に従事。現在では、実験的に作られる種々の異所性硬組織を用いて、独特の領域を著実に開拓しつつある。かたわら、医歯大荒谷教授のもとに学び生化学の研究にも余念がない。同君の仕事は、本学の一角に硬組織の組織化学に関する一橋頭堡を築きたいという、われわれ多年の願いを実現してくれるものとして大いに期待される。

主論文 發育途上のラット骨、軟骨、歯牙の酵素組織化学(英文、本学欧文紀要三巻、一号、昭和三十三年掲載)

竹内 太刀夫君



タケウチタチオ君は同窓の亡父鈴木九四郎氏の二男。静岡県立掛川西高校を経て昭和三十三年母校卒業。講師を経て当微生物学教室の助教に任ぜらる。高添助教と共に切磋琢磨して教室の発展に寄与された。旧制医博の面倒を見ながら独自の分野を開拓せられて提出

された論文は、三十七年十月十六日の母校研究科委員会にて、小生主査の下満場一致通過し同日付歯専第三号乙(論文博士第二号)の学位記を得られた。新博士は満三十一才で美耶子夫人と共に杉並区荻窪四ノ五八常盤荘に住み、水泳で鍛えた強健な青年学徒。主論文は口腔内P.P.L.Oの分離について、歯科学報六十二巻六号(昭和三十三年六月)掲載。慶祝。(米沢和一記)

さした論文は、三十七年十月十六日の母校研究科委員会にて、小生主査の下満場一致通過し同日付歯専第三号乙(論文博士第二号)の学位記を得られた。新博士は満三十一才で美耶子夫人と共に杉並区荻窪四ノ五八常盤荘に住み、水泳で鍛えた強健な青年学徒。主論文は口腔内P.P.L.Oの分離について、歯科学報六十二巻六号(昭和三十三年六月)掲載。慶祝。(米沢和一記)

嶺崎 亥生君



タケザキイセイ君は鹿児島県立大口中を経て昭和三十三年母校卒業。翌年九大医学部口腔外科に進み、藤野博教授の下、外科系を専攻せらる。三十八年九月二十五日の同大学医学部教授会にて藤野教授主査の下、学位論文満場一致通過し九月三十日付新制医学博士号が授与された(九大医博甲一一一八号)。新博士は、福岡市昭代町三ノ三三八の敬父の診療所で臨幹に従事の傍ら、午前中は九大の教室で、米田N・I・Hより研究費を受けて口唇裂、口蓋裂患者の家系を引続き調査中。美達子夫人との間に一女あり、趣味はスポーツと音楽。主論文は、口唇裂、口蓋裂の臨床統計的並に遺伝学的研究、人類遺伝学雑誌七巻四号(昭和三十三年十二月)掲載。慶祝。(米沢和一記)

科歯科学教室で故岡田亮治教授の指導を受く。十一年暮宮崎県都城市姫城町四二一七で開業し今日に及ぶ。感ずる所あってか、二十九年より大阪歯大第一解剖、白敷美輝雄教授の許で研究。三十八年二月京大医学部教授会に提出の論文は、堀井五十雄教授主査の下、満場一致通過し三月二十三日付新制医学博士号が授与された。新博士は十二人兄妹中の三男で、兄弟たる不可止、寿太郎君も母校同窓。ヤエ子夫人との間に四男あり、長男幹彦君は母校在学中。目下県歯会長、日歯政連副会長、九歯政連会長等の要職にあり、趣味は囲碁。主論文は歯胚移植時の種々な条件が歯乳頭組織の發育に及ぼす影響について、大阪歯大第一解剖学教室論文集、第六十七輯(昭和三十三年五月)掲載。慶祝。(大井清記)

讀井 善治君



サヌイヨシハル君は福岡県立修猷館高校を経て昭和三十三年母校卒業。直に九大医学部歯科教室に入る。翌年同大学院医学研究科に進み、藤野博教授の下、外科系を専攻せらる。三十八年九月二十五日の同大学医学部教授会にて藤野教授主査の下、学位論文満場一致通過し九月三十日付新制医学博士号が授与された(九大医博甲一一一八号)。新博士は、福岡市昭代町三ノ三三八の敬父の診療所で臨幹に従事の傍ら、午前中は九大の教室で、米田N・I・Hより研究費を受けて口唇裂、口蓋裂患者の家系を引続き調査中。美達子夫人との間に一女あり、趣味はスポーツと音楽。主論文は、口唇裂、口蓋裂の臨床統計的並に遺伝学的研究、人類遺伝学雑誌七巻四号(昭和三十三年十二月)掲載。慶祝。(米沢和一記)

卒業し、卒業後も在学中より入室していた理工学教室で恩師金竹教授の下で理工学を一貫して専心されて来(六頁五段へ)

新名誉会員新井教授のプロファイル

東京歯科大学同窓会評議員会で満場一致名誉会員に推薦された、解剖の新井先生は、長野県更級郡の名家の生れである。そう聞けば、気骨のある、負けじだましの、折目正しい先生の風格もうなづかれることが多いと思います。それだからこそ、大正十三年慈大卒業より今日まで、震災、戦災にめげず、公私とも苦しめた幾星霜をくぐりぬけ、伝統を誇る慈大解剖教室を守り、今日の大をなした訳であります。

その間、第二の母校東京歯科大学に昭和三年講師として奉職、昭和八年教授に栄進、爾来大学院発足まで三十有余年の間、数千の本学学生に解剖学を教授され、さらには歯科医としてばかりでなく人間としての生き方をしめじみと教えられた。多くの学生に囲まれた中で屍体に向いて走るように動くメスをぬって口もとから流れでるばくとつとした人生物語、社会評論を忘れ得ぬ人が多いことだろう。

その上、本学解剖教室の育成に努力され、現在卓越したセルロイド注入標本をはじめ数々の世界に誇りうる標本の大部分は先生の指導のもとに、標本の鬼故志村起先生によってつくられたものであります。さらには、本学関係者で先生の指導下に学位をとられた者も五十有余人になるのではないかと想像されます。「僕は月給がはしくてこの学校に務めているのではない」という先生の言葉こそ、この標本と共にすべてを語る言葉だと思います。過ぐる年、日本解剖学会総会会頭を引き受けられ、つづいて国際解剖学会日本代表として欧米に出張、また、本学名誉教授、慈恵会医科大学教授、理事等、教育、学会に多忙な毎日を送られた先生も功なり名をとげ、本年慈恵医科大学で停年をむかえられるとのことでありました。幸いなことに、令夫人の教育よろしきを得て、御長男は産婦人科医として慶大に在職、次男の方は、本学を卒業後、無歯科医村であった東北で勤務されていると、また、すぐれた御弟子さんも多く、慈恵大森田助教授、東邦大加藤教授と出色のほまれ高い先生が先生の学風をうけついでおります。今後とも、先生には教育はいうに及ばず、長年心血をそそいで集められた標本、研究成果をまとめられるとかうかがいが、頭が下る思いであります。先生におしえを受けた者の一人として、また同窓会員の一人として先生の御多幸を念じるものであります。(上条)

九州歯科大学学長永松勝海先生が、本年一月五日突如として逝去された。一月十六日、小倉体育館において、厳肅盛大裡に大学葬が営まれた。母校を代表して杉山学監が葬儀に参列された。本同窓会も靈前に花輪をささげ深く哀悼の意を表した。

各地同窓会のうごき

千葉県支部

去る十月二十日千葉市医歯業会館に於て、昭和三十七年度同窓会千葉県支部総会を行った。これより少し前、本県出身の鹿島俊雄参議院議員が科学技術政務次官に就任され、またこの春、会員の井上裕君が県議に当選したので、かねて、それらのお祝いを計画していたところ、なかなか、適当な日がなく延び延びになっていたが、たまたま諸般の事情で本年の総会が遅れていたため、それと一緒に開催することになった次第である。折悪しく、福島学長は新潟へおでかけで、御都合悪く、学監、病院長先生もそれぞれ御都合がつかなくて、その点、やや淋しい総会だった。



だが、母校からは学術講演の講師として保存の森本優助教授をお迎えした。総会は近年にない多数の会員が参集し、型の如く進められ、今年は役員改選期に当り、杉山支部長は辞意が固く、再任を固辞されたので、前例に従って選衡委員会により慎重な協議の結果、坂義一先生が新しく支部長に就任されることになった。杉山閣下先生は昭和三十年から八年間、四期にわたって支部長として、本県同窓会のためお骨折りを下されたことになり、会員の感謝の的となっている。尚、坂新支部長の希望により、天羽、百束両副支部長以下役員全員は留任と決定した。折柄、故花沢先生御出生地の本県香取郡大栄町に於て、町有志、有力者の間より先生の顕彰碑建立の議が持ち上り、地元同窓会としては坂支部長以下このことに力を結集して、立派なものを作るべく協力することになったので、新役員に課せられた任務は重い。何卒、全国同窓会各位の御協力を心からお願いする次第である。終て、京成飯店に於て祝賀懇親会が開催され、集う者五十名、和気あいあいの内に宴は進められ、全員、手をつないで輪になって校歌の大会唱をして再会を約し総会の一日は終りを告げた。

墨田支部

入江先生藍綬褒章受章祝賀会開かる

(百束記)



本支部の元老入江義次先生は、昨十一月十四日宮中において夫人共々両陛下に拝謁仰せつけられ、榮ある藍綬褒章を受けられた。これを祝わんとする我が支部の有志三十名、福島秀策学長および次期同窓会長田丸将士先生を交えて旧臘十一月二十九日夜六時より、墨東の玄関口たる錦糸町駅ビル六階香港茶廊に相会し盛大な祝宴を張った。同夜は定刻には支部会員の殆んどが顔を揃え、初宵から和氣霽々の裡に、入江先生夫妻、学長、同窓会長

を囲んで一夜の歡を尽した。

因みに、本支部は入江先生を始めとして、五十嵐庭治、大村太子二、関根卓、秋川福繁の諸先生等々有力な先輩雲の如く、続く壮、青年会員も多士済々で、元本所の会長末統寛先生、評論紙上で活躍の木村哲男先生等がおられ誠に心強い限りではある。昨春、若い世代の者達で会造りをとの先輩の声掛けで、支部長以下左記の如く若返りを敢行した次第です。

支部長 森山徳長、副支部長 関谷三郎、理事 武井範彦、同横須賀誠道、同佐藤正夫、同湯浅和海

近畿連合同窓会

晩秋、早朝のしじまを破って米大統領暗殺のニュースが全世界を震撼させた一九六三年十一月二十三日、一方人工衛星を利用して始めて日米テレビ中継成功と明暗共に世界史上に永遠に記録されるべき日となったこの日、恒例の近畿連合同窓会は、快晴の琵琶湖畔に盛大に開催された。地元滋賀県同窓会は全国屈指の少数会員県、しかし支部長以下全員一丸となって「近畿は一つ」の伝統と光榮を全うせんと再三再四の準備委員会を開き万全を期して此の日にそなえた。正午頃より、東海校歌のメロディが全館に流れる会場の琵琶湖ホテルには近畿各地より陸續同窓会が参集、その数凡そ百余名、東京よりは福島学長、松宮教授、高木教授(前厚生省歯科衛生課長)、田丸新同窓会長、協同窓会理事が来会、定刻一時三十分、湖周連山の錦秋に映える琵琶湖を一望に見渡す大会議場で、地元、中島達郎君司会の下に総



会が始る。校歌斉唱、物故会員に慰霊の黙禱を捧げ、藤原滋賀県支部長の開会の辞、引きつづき、地元出身で、滋賀県東部同窓会名誉会員である松宮教授のごあいさつ、東海同窓会ならではの家庭的ムードの中に一同の心が和む。次いで急逝された中井前会長のあとをつがれた田丸新会長の「同窓会かくあるべし」の抱負と決意が述べられ、今後多事多難の同窓会の前途に近畿同窓会各

位の協力と支援を希望する旨の要請があった。福島学長よりは昨年の同窓会の時より懸案の関西での入制復活問題、学費、母校職員等の停年制等の説明を含めて近況報告があり一年大いに謹聴させられた。また極く最近、厚生省歯科衛生課長を辞任、母校教授に就任された高木圭二郎先生のごあいさつが、あつて議事に入ったが、全議案異議なくこれを諒承次期開催地京都の小池支部長より「来年は京都で会いましょう」のあいさつがあり、地元曾我支部長の閉会の辞で一応総会を了つた。少時休息ののち、今年度始めに企画された「観光」をやめて「実益」を」と云う線、大井証券社長の大井浩氏の世界経済と日本の「証券事情」と云うソノモノズバリの講演を聞く、折しもケネディの急死と云う事態もとり入れた、講師の熱演は、ウィットとエーモアを巧みに配して参会者一同を最後まで飛び出した。あとで熱心な質問も飛び出し、仲々有意義で新企画は大いに好評を得たようである。戸外に出て湖面の夕映えと絶妙のコントラストをなすグリーンと芝生の庭園で記念撮影、引き続き地元長坂準備委員長(泉副委員長)の歓迎のあいさつによりホテル大食堂で懇親会に入った。先づ松宮教授の発声で乾杯、宴の深く進むにつれ、飲み、酔う程に司会の名リードで、各府県別に参加全員の紹介があり、気合いあつた大パーティとは相成つた。時の経つのも忘れ、つきぬ名残りも田丸会長の東海大万歳、福島学長の近畿連合同窓会の万歳三唱で来年度の再会を約し、地元配慮のパスに分乗して散会となった。尚、当日参会者の胸につけた名札止めのバッチはそのままネクタイピンになり、銀

白の比叡山と琵琶湖を象徴した中に黒地に金色のTDCのマークを入れたオツなもの、これは地元中島連君の苦心の作で、仲々の好評を得、不参加者のおみやげにと買つてかえらる御仁もおみやげに、地元会員の中には自分の分まで強奪された人もおるとか……(一ヶ三〇〇円、御希望の方にはおわけします)

滋賀県支部

(佐藤守記)

日本本土のはば中央に位し、その真中にボツカリ大きな琵琶湖と言う穴のあいたドーナツ県、これが滋賀県である。此所に全国屈指の少数会員であるが大いに張切っている東歯同窓会がある。

偶々、今年度の近畿連合同窓会の当番をお受けして、平素の固結ぶりを発揮、見事その大任を果してようやくその真価を認められるようになった。

その原動力となつたのは、「本曜会」と称する東歯同窓会を中心とした臨床研究会である。

数年前より、湖北長浜地区には既に母校矯正学教室より講師を招いて熱心に矯正研究会を開講、長坂健一(昭和十二年、泉副委員長)と言う口八丁、手八丁と言う好リダーを得て平川幸夫(昭和二十六年)と泉郎(昭和二十七年)と言う好アシスタントを中心に年々盛況を極めていくが、約二年前より此のメンバーを中心に県下全同窓に呼びかけ毎月第二木曜夜七時より約三時間、臨床を中心とした学会を開こうと云うことになった。幸い少人数とは云え、高田恬(昭29、病理講師)島野達也(昭28、外科、X線講師)と云う現役組、藤居正太郎(昭19、9、衛

生)、上野一久(昭19、9、衛生)、佐藤守(昭22、病理、県立衛生士学院講師)と云う研究室の空気を吸って来た連中、又当時大学院在学中の住井泰之(昭34、理工)と云う各方面の人材もあり、加え、これ又名門の御曹材で目下研究中の石田喜之(昭23)又、若い者に負けられぬと藤原鎮雄(昭6、泉支部長)曾我太(昭7、泉支部長)中島治(昭14)のハッスル組、更に新らしく、磯部茂治(昭25)、森島英治(昭37)と云う面々、会計面には名会計の誉れ高い佐藤健司(昭15、泉歯国保専務理事)の強力バックアップを得てその活動を開始したのである。

新しい歯科医学の吸収と、日常の臨床に於て遭遇する種々の難問を、一同が共に考え、共に悩んで、一つの解決策を見出して明日の臨床に役立てている。仲々好評で独り東歯同窓会のみならず県下同業者にも呼びかけ、大いに感謝されている。会場も県下各地の巡回、回を重ねるごとに盛況をみせている。既に母校、大歯、京大、愛知学院大等より講師を招聘し、又、鹿島参議院議員の特別参加や、遠く福井県会員の参加もみている。今回、松宮教授のお世話で、母校の若手新進講師のあせんに願えることになり、此れを機会に、本県のみならず近府県にもその参加を呼びかけることになった。今後も母校はもとより、全国同窓各位の絶大な御支援をお願いする。

(世話人、長浜市三ツ矢南、平川光夫)

(佐藤守記)

目黒支部(千樹会)

当支部例会は、繰上げ忘年会を兼ねて、十二月七日(土)六時より、目黒八百吉本店にて開催。集う者二十

二名。当日二時より開かれた歯科医師会主催、学術講演会の講師、田村助教を宴席に招き、演題であった「歯科麻酔」を座談に持込んで終始おしびれムードの裡に意義ある一夜を過ぎした。

目黒支部は出席の吉峰長利氏が「六十四才のこの俺がこどもあろうに最年長者とは」と頭を抱えて時の流れを回想した様に、ここ数年の新陳代謝は激たるものがあつた。千樹会の名付親、前会長中井武一郎氏を筆頭に、この四年間に、実に十指を数える先輩が次々と鬼籍に旅立って仕舞つた。そして、世代は交替し、若手層の進出を促した訳であるが、未だ、十分にその欠を補填するまでに至っていない。

若い人達により多く参加して貰つて、悪い場としての支部同窓会の価値を高める為には、座して来るを待つのではなく、更に積極的な「連れ出す」努力を旧人達は見せるべきであらう。新年度の課題とした。

(村越記)

学校支部

昭和三十八年度の支部総会は、旧臘十五日(日)神奈川県真鶴町のケイブレスで開催された。当日は八時半大歯病院前集合、大型バス二台に分乗、途中ガイド嬢のさえずりに耳を傾けながら江の島、真鶴海岸のドライブウエイを快走し、正午過ぎ真鶴半島突端にある会場に到着した。総会は会員九十余名の出席を得て、高添副支部長の司会で開かれた。先づ支部長山本教授の挨拶の後、米沢教授を議長に選出、庶務報告(中久喜副支部長)、会計報告(羽賀理事、北村勝衛監事)が承認さ

れ、議事に入った。議題は任期満了に伴う役員改選の件であつたが、慎重審議の結果、長尾教授が推薦され新支部長となった。次いで森本理事により閉会が宣され懇親会に移った。初めに当日丁度古稀の誕生日を迎えられた福島学長、引継ぎ同窓会本部代表後藤理事の挨拶を戴いた。宴席は新旧会員を織り交ぜ、さらに同窓会事務局、本校および市川の職員有志の特別参加もあり、一方子供連れの会員も見受けられて終始和やかに運ばれた。やがて時刻も過ぎたので一同名残りを惜しみつつ席を立ち三時半再びバスで帰途に着いた。

あわただしい暮の日曜ではあつたが好天にも恵まれ有意義な一日を過ぎた。なお地元同窓、高橋信吾、高橋謙作、山田潤父子、草柳嘉一郎、小川知二、渋谷章、佐藤隆三諸氏の臨席を戴きかつ多大の御支援を賜ったことを記し謝意を表する次第である。

(中久喜記)

(四頁三段目から)

たが、今回主査金竹教授御指導の下論文をまとめた副査杉山教授、北村教授、関根教授、木村教授の御指導を得て提出論文は教授会で満場一致通過、昭和三十八年七月十二日付で栄ある歯学博士号が授与された。新博士御郷里愛知県小牧市の実家には尊父長谷川新太郎氏が開業されている。母校同窓の歯科一家の長男である。川崎市百合ヶ丘の自宅には何子夫人との間に一女一男あり。現在理工学教室講師として第一線で活躍中。主論文、「インレーの鑄造精度に関する実験的研究」歯科学報第六十三巻掲載。

クラス会 便り

東遊会

旧名東友会旧臘十二月十日(火)
午後五時から千代田区神田東松下町
(昭和通)料亭「もとみや」において
吉例親睦会を催した。集り来るもの
遠く姫路市開業の塩見寿二君はこの
会合に出席のため態々上京したとい
う熱心家もいて宇都宮市の築瀬真策
君高崎市の宮下一郎君横浜市の榎原
勇吉君を始め都下八王子市から牛久
保長一君三枝文平君町田四郎君等四
十五名の多数に上り頗る盛会であつ
た。

定刻井上会長は開会の辞を述べ会
員中から七十年の伝統に輝く母校同
窓会々長に選任された田丸将士君に
祝意と激励の辞を述べ田丸将士君は
これに答えて「何んの巡り合せか会
長の重責を担うに至ったかは判らな
いが在任中は会則の規程に依つて何
らの術策を弄することなく公明正大
に会務を運営して江湖の期待に副い
たい覚悟でありそれには盟友各位の
御支援と御協力を切望する」旨を述
べ一同は拍手してこれに応えた(因
にその後中久喜八十君は同窓会監事
に選任され一月一日就任した謹祝)

ついで高齡七十七才以上の吉井保
三、船坂伝吉、平出美雄、牛久保長
一、の四君に夫々記念品を贈呈し御健
康と長寿を祝福し吉井保三君が代表
して謝辞を述べた。更に席席順に自
己紹介を行い大塚副会長はつけ加え
て長寿の秘訣を披露し大村太子二君

からは諸君の声は次回会合の例には
再び聴くことの出来ぬ場合もあるや
も知れぬ故録音して置くべきなどの
冗談も出たが八十二才の長老吉井保
三君も至つて御元氣に見受けられ大
村太子二君の心配は杞憂とも考えら
れる程であつた又上田貞三君のいつ
に変わぬ名調子の自己紹介も耳に爽
かであった。かくして宴に移り一同
心置きなく酒杯を傾け三輪副会長の
御骨折で盛沢山な余興に興じながら
年の瀬の迫るも忘れて歡を尽し名残
惜しくも散会したが何れも年配者の
集りであり交通事情の險惡な時でも
あるから成るべく夜間の集りを行
つて欲しい。又一流場所の一泊旅行も
計画実施して欲しいなどの要望もあ
つて役員側も善処するよう約束した
なお今回配布した「会員名簿」は
印刷所一世印刷KK社長会員原田進
君の寄贈によるもので御厚意に対し
感謝の意を表します。

(三輪源七記)

本会役員は次の通り

会長 井上 真
副会長 大塚 豊美
幹事 三輪 源七
久木留広、畦森語一、
小山内喜久治、佐々木
重文門、地挽鐘雄、北
原徳次郎

無二会

大正二年卒業の無二会は去年の秋

京都奈良を中心として満五十周年会
合を行ったが、今年は信州と決定し
ていたので私と笠原君はあれこれ
やと準備万端整えていざ御参なれと
待ちかまえていた。

十月十五日正午頃続々と繰りこん
で来たクラスメートとその家族たち
合せて二十一名、場所は諏訪湖畔の
布はん別館やあやと例によつて一
年振りの久闊を序す。まるでおもち
や箱をひっくり返したような賑やか
さの中で旅館前に用意された貸切バ
スで霧ヶ峰高原へと向つた。少々雲
り勝の天気だったが暑からず寒から
ず絶好の秋日和、山肌添ってバス
は落葉松地帯を車中の歓声の裡にや
がて荒涼たる草原に出る。ここが霧
ヶ峰高原である。南北にアルプス
を、それにハツ岳、秩父、浅間の山
々を望むのであるが、今日はいく分
薄雲りに覆われて遠く富士山だけが
新雪の容姿をくつきりと浮べてる。
晩秋の草原には高原ならではの松虫
草が美しく咲き残つて一同の目をひ
いた。

紅葉の峰を曲れば雪の富士。

霧雪の富士見晴せてこゝ霧ヶ峰。

霧晴れて落葉松もみぢつ々くな
り。

音に聞く霧ヶ峰牧場もこの近くで
ある。起伏の多い草原にはシイズン
オフのせいでサラブレッド種の馬が
あちらにもこちらにも放牧されてい
る。サラブレッドといえは一頭が何
百万円という競走馬である。一同は
胸一杯に大氣を吸い雄大な美しい眺

めに恍惚となり都会の忙しき、いら
だたしきも一度に洗い清められるる
思いである。

落葉松樹海も黄き夢の海
秋日和静かに廻る水車

伊藤初太郎
堀江 都紫

放牧の自由の丘に柵があり
山の氣を胸一杯の腕を撫で

名残り惜しみつつ再びバスの人と
なる。鉄平石の採掘を目のあたりに
見て生産力の偉大さに驚異を感じる
ばかりである。

層をなす鉄平石や薦もみぢ
りんごも色づきとっしりと枝を垂



れた畑もあれば各家々の軒もみな赤
い林檎に彩られて地方色豊かなる邑
を町を通過して宿に着いたのは黄昏れ
近い頃であつた。一風呂浴びてきて
宴会、正しくいうと無二会の年次総
会である。

まづ堀江常任幹事から会務報告、
会員の現況等が詳かに報告せられて
から物故会員に対し敬肅なる黙禱を
捧げる。次に当日欠席の宇野孝君
(仙台) 高田政雄君(宇都市)の両
君から寄せられた土産物の配布があ
つて、ぐつと座がどよめいたのを機
会にお膳が運ばれ宴会となる。われ
と思わん者は各人各様の隠雲の統出
に宴もたけなわとなる頃いきなり演
会場の舞台でド、ドドンと大太鼓
が鳴りひびき諏訪の名物諏訪太鼓を
披露に及んだ。諏訪太鼓は遠き昔よ
りの当地の郷土芸能であつて今は当
市の旅館組合の同志十二名を以て構
成されてこれを継承しているもので
ある。揃いのハッピにねじり鉢巻と
いう勇壮ないで立て神楽太鼓、豊
年太鼓、諏訪太鼓、霧ヶ峰太鼓の四
曲の演奏、そのリズムの整調に会員
一同茫然自失の態にて感銘深きもの
があり司会者としては大いに面目を
施した。

翌十六日朝八時半出発バスで上高
地へと遠征の旅に出る美しい諏訪湖
の岸辺を縫うてバスは甲州街道を下
諏訪へ抜けるこの辺一帯は近頃すば
らしい大産業地に表現をしている。
精工舎、ヤシカ、オリンパス、三菱
製薬等々時計カメラオルゴールなど
精密工場のひしめき合っているところ
である。やがて塩尻峠について小

蕨、川柳一句あり

絶景を立小便のバスはほめ

黒崎 博

この峠は天竜川と信濃川の分水嶺
広重の富士三十六景中の一つである
が今日は生憎その姿を見る事が出来
ない。諏訪湖を中心に盆地の眺めは
また格別である。ここから松本まで
は相当の道のりであるが桔梗ヶ原の
古戦場へはいるところもまた新しい
産業都市信州はいまや農産地帯から
近代的工場地帯へ移り変わろうとし
ているのがひしひしと感ぜられる。
ぱっと眺望が開けるとここは梓川
の峡谷この辺から上高地まで四十キ
ロ、それが山又山の全山が一面の紅
葉に包まれその美しさは到底筆致の
及ぶところではない。

山紅葉細流に照り渡りけり

黒崎 博

谿風に吹かる、紅葉散るもみぢ
青丹よし山又山の秋の色
断崖に懸る紅葉の綾錦

黒崎 博

幾度道すきて向あり山紅葉
帯の道見あげ見下す紅葉山

伊藤初太郎

この辺は道の道が多い。清水ト
ンネルを抜けていくつかのトンネル
をまた抜けるとようやく上高地到着
である。上高地はわれわれを焼岳の
噴煙で迎えてくれた。梓川の清流を
前に河童橋の袂で昼食。ここで一同
揃って記念撮影。上高地はもはや秋
色深く風に散る落葉松の金粉がわれ
われのベレー帽を婦人の方の髪を飾っ
てくれた。三々五々打つて心ゆく
ばかり秋色に浸った。

大正池化粧柳を見て帰り

黒崎 博

かけのぼる雲足早き紅葉山
沢渡や毛皮を店にひさぎをり

伊藤初太郎

落葉松のおち葉する日の穂高見ゆ

堀江 都紫

帰りは松本の城下町を素通りして
浅間温泉で旅装を解いたのは午後五
時、その夜の宴会は古い古い昔へと
かえり水道橋時代の学生気分デカ
ンショもよからう恋はやさしもよか
ろうと唄うも踊るも楽しく更くるも
知らぬ有様であった。

唄声や明治は遠くなりけり

松本に光る古城がデンと立ち

黒崎 博

明けて十七日はもうお別れの日で
ある。思い出の為と一同松本城見物
に出かける。この城は国宝である最
近鉄筋の急ごしらえの城が流行して
いる折柄松本城は三百年の伝統を保
つて木造の黒ずんだ床しい城である
この見学に終止符を打ち東京行は
正午発、新宿行急行、関西方面は十
二時十四分発の大阪行急行と来年の
無二会での再会を約して散会した。
来年は十月土佐(高知)で開かれ
横矢重包君を頼むことになってい
る。今回の参加者次の通り。
伊藤初太郎、令嬢、若葉清、宮島弘
二、高田実、岡本吉詞、黒崎博、同
夫人、佐塚孝一、同夫人、横矢重包
令嬢、令息夫人、令孫、堀江桂一、
同夫人、笠原益三、同夫人、三輪充
武、同ひろ子、外に近江誠一(笠原
方代診)

昭和三十八年十一月記

三輪充武記

十四会(昭和四四年卒)

日時昭和三十八年十月二十日
ある。クラス会総会のローカル進出
第二回とあって「草津よいとこ一度
はおいで」の呼声高く地元出身の幹
事は大いに張り切って準備を進めた。
当日は日頃の心懸け良好のため秋晴



れのお天気であった。相替る二十
名、遠く四国の平田君、石川県の牧
野君、静岡県豊田君等々よくまあ
こんな群馬の山奥まで来てくれたも
の和我々を感激させた。総会は一応
形式をとって山口君司会となり藤正
会長、高橋幹事長、斎藤地元主席幹
事の順で挨拶があった。
藤正会長は僕はこの中で最年長だ
が少なくとも僕のはまだ生きたら
事僕は立証している。出来るだけ
長生きしてほしいという。高橋幹事

長は我々は最後の二人になるまでこ
の会を持ちたいものだと思ふ。然
し、何れもつしみを忘れぬ紳士
たちであつた。宴会後でんでに描い
てもらつた銘々の似顔のコケシはま
ことによい記念の品である。
翌朝九時出発、くるまで白根登
山、紅葉は少し時期を過ぎた感じだ
があつたが、美事なシャクナゲの密生
林、コバルトの湯を湛えた火口の湯
釜、西部活劇に出てくる様な雄大な
山形等々一同十分満足の態であつ
た。昼食後又くるまで広漠たる六里
方原をよぎり、奇岩が果しなく群る
鬼押出しの異様な風景に驚嘆し、更
に軽井沢から碓氷峠、妙義等の紅葉
を道々満喫して四時頃高崎に到着、
そこで左右に別れた。一日の行楽行
程として大へん充実したもので会員
諸君が喜んでくれた地元幹事も嬉し
い次第である。来年はオリンピック
を機会に東京で総会を開き再来年は
又地方に出る予定であるという。

(今野)

出席者
小野(重)、秋川、藤正、高橋、平
田、河村、遠藤、堤安、小谷、山
島、土屋、牧野、半田、塚田、大久
保、井上、同夫人、山口、斎藤、森
下、今野(順不同)

四海会

昭和八年卒菊花薫る佳き日十一月
十日卒業三十周年記念式典がホテルオ
オクラで正午、名司会小坂副委員長
により左記順序で開催されました。
挨拶
恩師(前)記念品贈呈 針谷 先生
乾杯 中道 先生
恩師諸先生の謝辞
鹿島政務次官就任祝辞

謝辞
伊東 先生
鹿島 先生
吉井 先生
一の湯へ一路向う夕刻より懇親会を
開催した宴酣となるや母校時代の学
生にかえり年輪をわすれたいにたの
しく、大いにむじやうに、大いに旧
情をあたためました。猶来年は山本
委員長が欧米視察に出張の為め長尾
先生が委員長に万場一致決定しまし
た。

当日の参加者
来賓 福島学長 溝上先生
矢崎先生 大井先生 杉山先生
会 員

門馬弘 勿来市、保坂正彦 高田市
中道嘉門 秋田市、手塚稔 長野県
山口重敏 東京、伊東正二 京都府
成宮貞一郎 長野市、湯口善吉北海道
鈴木伊三郎 東京、橋本 栄 東京
長尾喜景 東京、前島鏡吉 東京
中条弘 東京、柏倉武男 東京
平岩宗平岡崎市、平井猛夫妻小樽市
服部純治 青森県、国沢重信 高知市
難波徹男 東京、中島良三 滋賀県
高田直秀 石巻市、鹿島俊雄 市川市
小坂力 東京、吉井三郎 東京、針谷
安大夫妻 夕張市、林華威夫妻帯広市
加藤亮之輔 東京、逸見穂 群馬県
河原武男 茨城県、増田悦蔵 羽生市
田原貞三 東京、野上榮次郎熊谷市
勝海昇一柏崎市、天田勝次 高崎市
青山勇三 東京、講呂木章吉 横浜
山島俊彦 東京、高橋 謙作 小田原
横山清太郎 岩手県、山本義茂 東京
岡田信雄 新潟市、村瀬正雄 東京
阿左見工 市川市、獄崎生 都城市
重浦靖治 東京、清信静夫 東京
翌十一日お互の健康を祈り来年度を
約し散会した。 山本記

一期会 (昭和二十八年卒)

一期会の皆々様には御家族お揃いで輝かしい一九六四年の新春をめでたくお迎えになられたことと推察申します。大学卒業後十一回目の新年であり、歯科界では勿論のこと、それ以外の各自独特な方面においてますます発展される年であることと信じます。今秋十一月には第三回一期会総会が千葉県で開催されることに決定、その準備に地元君が着々と努力されております。全会員が是非共にこれに参加なされますよう「一年の計は元且にあり」の喻もありますので、今から御準備下さいますようお願い致します。

母校卒業以来口腔外科学教室に在職すること十有余年にわたった級友倉繁準之助助教授は誠に止むをえざる家庭の事情のため、去年十月末を以て母校を退職、郷里に帰られて家業を継がれ、毎日一般患者の診療に当られることになりました。大学当局は勿論のこと、級会としても重要な人物を手離すこととなり、誠に残念に思う次第であります。専門職に十年以上も在職することは、現下の歯科界においては筆舌につくし難い努力が必要であったことと信じます。どうか今後は故郷にあつてこれまでの絶大な前進力を患者診療に、更に又口腔衛生の実際の発展のため励進されんことを心からお祈り申し上げます。そして、若しも許されるならば再び大学にそして研究に復帰なさる機会をつかまえますようになさることを願います。

級友大御雅文君が去る十一月十二日付で母校生理学教室講師(非常勤)に新任されました。又、一月一日付で級友宝田忠君は母校同窓会理事として新たに田丸会長の下で福祉共済を担当されることになりました。両

君の榮譽は一期会の榮譽でもあり、今後の御活躍御発展をお祈り申し上げます。(役員一同)

八紫会 (昭和三十三年卒)

雪が少ない年とはいえ、今年もスキー場は花ざかりのようです。八紫会の諸兄弟には元氣にお越しのことと思ひます。一九六四年の年頭にあつて、二、三の話話をひろつてお伝えいたします。

①昨年十一月の同級会総会は全国各地から六八人の同級生が参集し、赤坂プリンスホテルで極めて盛會裡に行なわれました。各地における同窓の力強い活躍には非常に驚かされ、心強く感じられました。その折りに撮影した記念写真は、年末に発送しましたから、もう皆様のお手元に届いていることと思ひます。⑧八紫会報第二号を二月末日に発行したいと思ひます。俺にも一筆!との声が数

新年名刺交換会の記

木村 哲男

いつのころから新年の名刺交換会にでるようになったのかわからな

多分同窓会の役員をやつときあたりから習慣づけられたものだろう。元旦になると、早朝家族を引連れて父のところへ年始にゆく、子供たちをおいてO先輩の家にゆく、車に乗せていただいで、東京歯科へ一緒にするというのが、年頭の私のきまつた行事になつてしまつた。

亡くなった北村宗一先生が、壇上から得意の東天紅をコケコッウと一声高くやつて、今年の鳴き方はいとか、余韻を引くとかいいてみんなで手を叩いたのも、まだ二、三年前である。そのあと、白川亭先生や

多くきかれるので皆様の投稿を待っています。⑨同級生の明るい話題をお知らせします。大学院三期生の渡辺、森川、斎藤、小宮、長谷川、桜井、長井、宝田の諸氏は論文が受理され今三月には新博士が誕生するぐれた画才と弁舌をもつて知られた菊地豊君の個展が一月二十六日から一週間銀座の文春ホールで開かれました。時ならぬ同窓会がひらかれることを期待します。外国だよりを二つ、渡米第一号のコスモポリタン青木君は二年間の在米生活を終えて昨

三崎教授が謠曲をうなつて、いっばい飲むのが恒例になつていたが、今年に専門学校第一回卒業という堀江銑一先生が珍らしく登壇し、「私は、はじめて新年にこの壇の上にあがつた」と感懐をこめて語られていた。

毎年出席する願ふれもたいした変化もなく、若い連中は何をしているのかと思はないでもないが、それぞれ矢張り正月のスケジュールはあるのだろう。それにしても、もっともつと若い気合の入つた名刺交換会が持たれていい筈ではないだろうか。古きを温め、新しいを知るという意味からも、若い人がクラス単位なり、歯科医師会単位なりで、どしどし

「慰める会」の会計報告

昭和三十六年四月五日「慰める会」結成以来二カ年半の年月を経て漸くここに会計報告をすることが出来ました。これ迄に寄せられた多くの同窓の方々の厚き御同情に対し世話人一同心から感謝致します。

収入の部	
一、基金	三、〇〇〇(發起人三十名)
二、東天紅の	〇、七〇〇(長田、帝國、吉田、様等)
三、抽出金	七、五〇〇(六七八名)
収入合計	
八五二、二〇〇	
支出の部	
一、弁護士四名に激励金	一〇、〇〇〇
二、準備委員会費	五、八〇〇
三、印刷費	三、三〇〇
四、通信費	四、六〇〇
五、事務費及び交通費	二、六〇〇
六、文房具及び雑費	二、七〇〇
支出合計	三〇、〇〇〇

つかしい先輩諸先生の温顔に接し、誰れかれとなく、学校の酒で話合えるということとは、また意義のあることであろう。

来年の元旦には、はきれちる若さの人々がより多く集まつてくれるよう祈るや切なるものがある。

差引 残金 六三、四〇〇

一、白川、井上、宮下、池田、栗瀬、五氏に各平等に金壹拾万円宛贈呈する

二、残金は裁判終結の晩に大慰安会を開き他校同窓の方々も御招待して、お慰めるための基金に保存する。

昭和三十八年十月三十日
世話人 責任者 岡本 伝

御礼

白川 享 井上 真
宮下 一郎 池田 清
築瀬 真策

謹んで新年の御慶びを申し上げます。過ぐる昭和三十四年、例の一件以来、同窓有志の方々には。私共の爲に、常に深き御理解と、温かき御同情をお寄せ頂き、昨冬は又、七百名に近い方々により、多額の御浄財を御恵手の上御重なる御慰めを頂戴し、御芳情の段誠に有難く、深謝罷り在る次第で御座います。

事件は目下、第二審に於て審理中なので、この際、事件に関する弁明は一切差し控えねばなりません。が、当時責任の地位に在った者として、法的不明や、行為に不手際のあった点は、之を卒直に認むるに吝でなく、御迷惑をおかけした段は深くお(以下次頁四段へ)

